
最弱ドラゴンの物語

聖騎士

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

最弱ドラゴンの物語

【Nコード】

N7080R

【作者名】

聖騎士

【あらすじ】

火も吐けない。空も飛べない。魔法も使えない。気弱で心優しい落ちこぼれのドラゴンと、人間の女の子の心の交流を描いた童話です。お菓子掌編小説投稿企画【candy store】参加作品です。

第一話「アイスクリーム」：出会い

遙か昔。

まだ世界には、人間が知らないことやできないことの多かった時代。ある深い森の中に、一匹のドラゴンがいました。

ドラゴンは世界最強の生き物でしたが、そのドラゴンは落ちこぼれのドラゴンでした。

火を吐くことも空を飛ぶことも、魔法を使うこともできません。

なのでドラゴンたちの住む天界から逃げ出して、人間たちの住むこの世界へ隠れ住んでいたのです。

でもそのドラゴンは、とても心優しいドラゴンでした。

「小鳥さんおはよう、ミミズさんごきげんよう」

ある朝ドラゴンは住処としている洞窟から出て、いつものように小川へ顔を洗いに出かけます。

春の暖かい陽射しが降り注ぎ、森の木陰ではリスたちが遊んでいます。

ドラゴンは彼らを踏みつぶさないように気をつけて歩き、にこやかに挨拶していきます。

「おはよう」

森のくまさんが木の陰から黒い大きな体を揺らせて現れます。

「おはよう、くまさん」

ドラゴンはにっこり笑ってお辞儀します。

本当はみんな怖がってもおかしくはないのですが、そのドラゴンは優しいとみんな知っているのです。

小鳥はドラゴンの角に留まり、おしゃべりを始めます。

ドラゴンは小鳥たちを驚かさないように静かに歩きます。

小川のせせらぎは優しい陽射しを反射して、きらきらと美しく輝いています。

この辺りは深い森の奥のため、人間たちはめったに現れません。ドラゴンは前足を小川に浸し、その冷たさに目を細めます。

「ああ、とっても気持ちがいいなあ」

じゃぶじゃぶ顔を洗っていると、寝ぼけ眼だったドラゴンの顔がしやきつとしてきます。

「今日は美味しいイチゴが見つかるといいなあ」

ドラゴンはイチゴが大好物です。

ドラゴンは本当は肉食です。

小鳥もリスもくまさんも全部食べてしまいます。

でもこのドラゴンはそんなことは決してしません。

心優しいドラゴンだからです。

そして森の動物たちも、そんなドラゴンの優しさを知っています。だから怖がったりせず、みんな仲良しです。

しやきつとしたドラゴンはのっしのっしと歩きながら、丘を登っていきます。

丘の上にはきれいな草原が広がっていて、その奥にイチゴがたくさんある場所があるのです。

ドラゴンはいつもその場所でごはんを食べます。
そう、大好きなイチゴがドラゴンのごはんなのです。

暖かな南風がドラゴンの立派なたてがみを揺らし、若草色の草原は
まるで海のようにきらめいています。
ドラゴンはこの森が大好きでした。
そしてそこに住むみんなが大好きでした。

「あれ？」

草原の丘を登っていくと、いつものイチゴの場所に誰かがいます。
小さなその後ろ姿は、どうやら人間の女の子のようです。

人間はとてもおそろしい生き物です。
木を切り倒し、動物たちを殺します。
ドラゴンはびっくりして動きが止まってしまいます。
でもこのままここに立っていても、ドラゴンの大きな体は草原では
隠しようがありません。

ドラゴンはゆっくりと後ろを向きます。
このまま森へ逃げようとしたのです。

「あら？」

するとドラゴンの背中へ女の子の声かけられます。

「あなたはだあれ？」

どうやらドラゴンは見つかってしまったようです。
ドラゴンは人間の女の子を驚かせないように、ゆっくりと振り返り
ます。

「あ、あのう、ぼく……」

「あなたはドラゴンさんね？ まさかこんなところにいるなんて……」

その女の子はドラゴンを見ても驚きません。

それどころかにつこり笑って近づいてきます。

ドラゴンは怯えて後ろに下がってしまいます。

「怯えなくていいわ。わたし道に迷ってしまったの。そしたらこのイチゴ畑を見つけて、お腹が空いてることに気づいたの。もしかしてここはドラゴンさんのイチゴ畑？」

女の子はドラゴンと比べるととても小さく、四つ足で立つドラゴンの胸あたりまでしかありません。

ドラゴンは長い首を曲げて女の子に顔を寄せます。

「あのう、きみはぼくが怖くないのかい？」

ドラゴンの言葉に、女の子はにつこりと微笑みます。

「だってあなたは優しい目をしてるもの。怖くなんかないわ」

ドラゴンは嬉しくなってとすんとすんと足踏みします。

「きゃあ」

地面が大きく揺れ、女の子は草むらに尻餅をついてしまいます。

「ごめんなさい、ぼくうれしくて……」

すまなそうに顔を寄せるドラゴンに、女の子はまたにっこりと微笑みます。

「びつくりしたあ、ドラゴンさんってすごいね」

ドラゴンと女の子は二人で声を上げて笑います。

ドラゴンの心の中は、暖かさで満たされていきます。

人間とこんなに笑ったことは、今まで一度もなかったのです。

「わたしはミュウ。あなたのお名前は？」

その時ドラゴンは気がつきます。

そう、ドラゴンには名前がないのです。

うるこの色によってブルードラゴンとかレッドドラゴンなどと呼ばれますが、人間のように名前呼び合ったりはしないのです。

「ぼ、ぼくには名前はないんだよ」

「ドラゴンさんにはお名前がないの？　じゃあ、わたしがつけてあげる。うつんとね……」

ミュウは顎に指を当てて考え込みます。

小鳥さんたちがあつちの木からこつちの枝へ飛んでいく間考え込んでいたミュウは、小さな手をかわいらしく打ちつけます。

「じゃあジグムントってお名前はどうかしら？　この国に伝わる強い騎士さんのお名前よ」

「ジグムント？」

その名前は何かすごく強そうで、ドラゴンはとってもうれしくな

りました。

「うん、すごく強そうでかつこいい名前だね！」

「じゃあ、決まりね」

ミュウは春の陽射しのように明るく微笑みます。

ドラゴンはうれしくて何度も「ジグムント」とつぶやいています。

「あ、ねえすっかり溶けてしまったけれど、これ食べる？」

ミュウは、腕に提げていたカゴから何かを取り出します。

木の器に入った白い塊は、とっても甘い匂いがします。

「これなに？」

「アイスクリームよ。だいぶ溶けちゃったけど、今朝できたばかりだからまだ大丈夫よ。イチゴを潰してかければきつとおいしいわ」

そう言うとミュウはイチゴを一つ取ってきます。

それを手で潰してアイスクリームにかけます。

白いクリームのとろっとした塊に、イチゴの赤い色がとてもおいしそうです。

「おいしそう、これぼくが食べちゃってもいいの？」

「うん、召し上がれ」

ジグムントは長い舌を出して、アイスクリームをぺろりと平らげています。

「冷たくておいしい！」

ジグムントの目がきらきら輝いて、大きくくりくりと動きます。
ミュウも嬉しくなって、いっしょになって喜びます。

「よかった、これわたしのパパが作ったのよ」

「ええ！ きみのパパは魔法使いかい？」

「いいえ、違うわ」

ミュウはにこにこしています。

ミュウのお家は村のお菓子屋さんでした。

ミュウは新製品のアイスクリームに合うジャムを作るために、森の奥深くまでおいしい果物を探しに来て道に迷ってしまったのです。

「でももう見つかったわ」

「もしかしてこのイチゴかい？」

ジグムントが聞くと、ミュウはうれしそうにうなずきます。

けれどジグムントは心配でした。

人間たちがこの森を荒らしてしまうのではないかと思ったからです。
でもジグムントがさういうと、ミュウは笑って手を振ります。

「ここはわたしとあなただけの秘密よ。 誰にも教えないわ」

「本当？」

ジグムントは安心します。

ミュウになら、このイチゴをいくらでも分けてあげてもいいと思っ
ていたからです。

「ねえジグムント、またここに遊びに来てもいい？」

「も、もちろんだよ！」

ジグムントはうれしくてまた目をくりくり動かします。

「それじゃ、わたしたち今日からお友達ね！」

「え？」

ジグムントは、ミュウが一瞬何を言っているのかわかりませんでした。

ドラゴンと人間が友達になったことなど、今まで聞いたこともなかったからです。

ドラゴンは、人間にとっても恐ろしい怪物だからです。

でもミュウはにこにこしてジグムントを見上げています。

ジグムントは思います。

今までだめだったからといって、これからもそうだとはいえない。

ジグムントはアイスクリームをくれたミュウが、大好きになっただのです。

「うん、ぼくたち友達！」

「うふふ！」

ジグムントはミュウを森の出口の近くまで、背中に乗せて行っただけました。

そしてミュウは「また明日」と、手を振って村へ帰って行きました。ジグムントはミュウの姿が見えなくなるまで、その小さな後ろ姿をずっと見つめていました。

ジグムントはもう明日が楽しみで楽しみで、仕方がなかったのです。

これが、ジグムントとミュウの悲しい物語の始まりでした。

第二話「キャンディ」：水の精霊

ジグムントは朝からそわそわして落ち着きませんでした。

ミュウがまた森へ遊びに来てくれるからです。

小鳥さんたちが朝のごあいさつをしてくれますが、ジグムントは森の入り口から目が離せません。

本当はミュウの村へ続く草原まで迎えに行きたかったのですが、そうすると人間に見つかってしまいます。

ジグムントの大きな身体は、草原ではめだってしまうのです。

ジグムントがそわそわしていると、草原の向こうから小さな焦げ茶色の頭が近づいてきます。

どうやらお目当てのミュウのようです。

ジグムントは森のぎりぎり端っここまで走って行って、長い首をさらに長くして待っています。

目はきらきらです。

ミュウはフードを被っているようで、両手ですそをぎゅっと握っています。

草原は風が強いのです。

腕には藤蔓^{ふじつる}で編んだ籠をかけていて、白い布巾がかぶせてあります。きつとまたおいしいお菓子を持ってきてくれたのでしょう。

ミュウはジグムントを見つけると、にこにこして走ってきます。

ジグムントはミュウが転んだりしないかはらはらして待っていました。が、ミュウは転ばずにジグムントのところまで走ってきました。

「ジグ、おはよう！」

「お、おはよう」

せっかくミュウに会えたのに、ジグムントは恥ずかしがって葉っぱ

で顔を隠してしまいます。

「ジグ」だなんて親しみを込めて呼ばれたので、とても照れくさくなってしまうのです。

ジグムントが葉っぱの裏のいい匂いを嗅いでいると、ミュウが籠に手を入れてごそごそと何かを探しています。

不思議に思っただけでジグムントが顔を出すと、ミュウはにこにこして手を差し出します。

「はい、これ！」

「え？」

ミュウの小さな白い手のひらはイチヨウの葉っぱのように開かれ、その真ん中には赤くて丸いものがのっています。

「これなに？」

ジグムントがしげしげと見つめていると、ミュウは籠の中から今度は紫色の同じような丸いものを取り出します。

「これはうちのお店で作ってるキャンディよ。これはジグの好きなイチゴ味、こっちはブドウ味」

そういうとミュウは、ブドウ味のキャンディをぽいと口の中へ入れてしまいます。

それを見てジグムントも、舌を伸ばしてキャンディを頬張ります。するとジグムントの口の中には、イチゴの甘い味がじゅわっと広がります。

「うわぁ、甘ぁい！」

ジグムントは目をくりくり動かして大喜びです。

ミュウはそんなジグムントを見上げて、ほっぺたをぷくぷくに膨らませてにこにこします。

「これは噛んじゃダメよ。ゆっくり舐めながら味わうんだからね」
「うん」

ジグムントもほっぺたを膨らませて、にこにこなずきます。

口の中できょろきょろ転がるキャンディはとてもおいしくて、ジグムントは目をきょろきょろさせてしまします。

ミュウはそんなジグムントに大笑いです。

ジグムントはさっきの恥ずかしさも吹き飛んで、ミュウを元気よくお誘いします。

「ねえミュウ、今日はぼくのとっておきの場所に案内してあげるよ」
「とっておきの場所？ うわぁ素敵！」

ジグムントは身を低くしてミュウを背中に乗せます。

そこは森の奥深くで、人間が歩いて行くには少しいへんだからです。

「じゃ、しゅっぱあつー！」

ジグムントはミュウが転がり落ちないように、気をつけて歩きます。それでもミュウはまだ乗り慣れていないので、きゃあきゃあ言ってジグムントの背中にしがみつきます。

しばらく歩くとミュウも慣れて、楽しそうに周りを眺め始めます。時々低い枝が張り出していますので、ジグムントは避けたり身を低くしたりしてミュウにぶつからないように気をつけてあげます。

「ねえ、どこに行くの？」

ミュウはまだキャンディでほったをぷくぷくしています。

「うふふ、とてもいいところだよ」

ジグムントはいたずらっ子のように笑います。

ミュウを驚かせたかったです。

ジグムントの身体は硬いところで覆われています。

すべすべひんやりしていて、とても手触りがいいのです。

ミュウは気持ちよくって、なでなでしてしまいます。

ミュウの小さな温かい手のひらを感じて、ジグムントもとても気持ちよくなります。

お日さまが森の木よりも高く昇った頃、ジグムントたちは目的の場所に到着しました。

「うわぁ、きれいな湖！」

ミュウの目の前には、青く澄んだ湖が広がっています。

周りは深い森に囲まれて、鏡のような水面には逆さまに木々が映り込んでいます。

それはミュウが見たこともない、とても美しい湖でした。

「ここは水の精霊さんが住む湖なんだよ」

ジグムントはミュウを降ろしながら、得意そうに鼻を鳴らします。ミュウが目をきらきらさせて驚いてくれたのでうれしいのです。

「今日はこちらでお昼を食べましょう」

ミュウは靴を脱いで、湖に足を浸します。

「うわあ、冷たあい！」

ミュウが足を入れたところから波紋が広がって、水面がゆらゆら揺れています。

するとその水面に別の波紋が浮かび始めます。

それはどんどん大きくなって、波紋の中心からきれいな女の人が見えます。

「あ、ウンちゃん、こんにちは」

「ドラゴン、その呼び方は言わない約束でしょう？」

その女の人は透き通るような声で笑い、すつとミュウたちの方へ進んできます。

なんとその女の人は、水の上を飛ぶように歩いて来るのです。

「ジグ、あのきれいな女の人だあれ？」

ミュウはお口をあんぐりと開けてしまいます。

「水の精霊さんだよ。名前はウンディーネさん」

「だからウンちゃんなんだね」

ウンディーネは青い身体をしていて、長い髪も青色をしています。服は着ていませんが、まるで水できているような透き通った肌です。

目は真っ黒で、まるで宝石のようにきれいです。

ウンディーネはミュウの前まで来ると、にこつと笑います。

「はじめまして女の子さん。あなたは人間ね？」

外なお風呂場のように声が反響して聞こえます。

ミュウは慌てて足を水から抜いて、きちんと立ってスカートの裾を直します。

そして両手で裾を持ち上げて、おしゃまにお辞儀します。

「はじめまして、わたしはジグの友達のミュウです」

「ジグ？」

ウンディーネは首をひねります。

するとジグムントは胸を張って、鼻から息をびゅつと吐きます。

「ぼくの名前だよ。ミュウが付けてくれたんだ」

「あら、そうなの。とてもいい名前ね」

「えへへ」

ジグムントはウンディーネにほめられてとてもうれしそうです。

「あ、そうだ！」

ミュウは手をぽんと叩いて籠をこそそと探します。
すると今度は青いキャンディを取り出します。

「はい、ウンディーネさん」

「これはキャンディですね？」

ウンディーネは水の精霊なので食べ物はいりません。

けれどミュウがにこにこ差し出すので、細い指でキャンディを取って口へぽいと入れます。

「これはソーダ味ですか？」

ウンディーネの口の中では、小さな泡がぷちぷちと弾けているのが見えます。

「はい、うちのお店で作ったキャンディです」

「うふふ、おいしいわ。ありがとう」

ウンディーネもほっぺたをぷくぷくにして微笑みます。

みんなぷくぷくの笑顔で幸せそうです。

そして「ごゆつくり」と言って、ウンディーネはまた波紋を残して湖に消えていきました。

それからジグムントとミュウは、湖の草むらに腰かけていろいろおしゃべりをしました。

ミュウの村のこと。

お店のこと。

森のお友達のこと、そして天界のこと。

「北の山には天界に通じる門があって、人間は近づけないんだよ」

ジグムントは緑色のスイカ味のキャンディを、口の中でころころ転がしています。

ジグムントは、すっかりキャンディが大好きになっていました。

北の山はいつも黒い雲がかかって、人間は怖くて近づけません。

ジグムントはそこからこの森へやってきたのです。

「ジグはいつかそこから天界へ帰ってしまうの？」

「ぼくは……」

ジグムントは何も言えなくなってしまいました。

落ちこぼれドラゴンのジグムントは、天界へ戻りたくはありません。なぜならジグムントは、天界で他のドラゴンたちにいじめられていたからです。

「ぼくはずっとこの森にいるよ。そしてずっとミュウと友達でいたいな」

「ほんと？ うれしい！」

ミュウはジグムントに抱きつきます。

ミュウもこの優しいドラゴンのことが大好きになっていたのです。

ミュウのパパとママが心配するといけないので、お昼を食べ終わった後にはまたジグムントはミュウを森の入り口まで背中に乗せていてあげました。

「じゃあ、また明日ね」

ミュウは背中から降りて、ジグムントに手を振ります。

ジグムントは寂しくなって泣きそうになってしまいます。

ミュウも泣きそうです。

するとジグムントは何か思いついたように、首を背中に回します。

「どうしたの？」

ミュウが首をかしげると、ジグムントは口に青い何かをくわえて振り返ります。

「これミュウにあげるよ。これを持っていれば、寂しくないよ」

ミュウの手のひらに、つやつやと青く光るジグメントのうろこが一枚のせられます。

ドラゴンのうろこは、とてもめずらしく貴重なのです。

泣きそうになっていたミュウの顔は、お日さまのようにぱっと明るくなります。

「ありがとう！ これでずっとジグといっしょだね！」

「うん、ずっといっしょ！」

ジグメントは、足をどすんどすん鳴らせて喜びます。

少し傾き始めたお日さまの下、ミュウは草原を村の方へと帰ってきます。

何度も何度も振り返り、ジグメントへ大きく手を振ります。

その手には青いドラゴンのうろこ。

ジグメントはまるで自分がミュウといっしょにいるみたいで、とてもうれしい気持ちでした。

けれども、このうろこが悲劇の始まりになってしまふのです。

そんなことは、今のジグメントとミュウには想像もつかないことでした。

第三話「クッキー」：竜憑き

ジグムントの住む洞窟からさらに森の奥。

そこは深い深い森の中。

きれいな空気とたくさんの木々に囲まれて、大きな大きな木が一本立っています。

その木はあまりにも大きく高いので、ドラゴンのジグムントでさえ長い首をぐうんと伸ばさないと上まで見えません。

今日ジグムントとミュウは、この木のところまで遊びに来ました。

それはこの森の主である精霊が宿る、聖なる木でした。

「すごい！」

ミュウは目とお口をまんまるに開けて、木を見上げています。

その木はミュウのお家より大きくて立派でした。

「ユグドラシルっていう木なんだよ。この森の中で一番長生きのおじいさんなんだ」

「ふおっふおっふお…… まだまだわしは若いぞ」

すると突然、木の幹に顔が浮かび上がってきます。

かぎ鼻のおじいさんの顔です。

「ドラじいさんだよ」

「ドラじいさん？」

ミュウは目をぱちくりします。

ジグムントはミュウにウィンクをして、ドラじいさんに深々とお辞儀をします。

ジグムントは誰にでも礼儀正しいのです。

「今日はぼくの友達のミュウを連れてきました。ここで遊んでもいいですか？」

「ふおっふおっふおっ…… もちろんいいとも。ゆっくり遊んでお行き」

「ありがとうドラちゃん！」

ミュウは元気いっぱいにここにしています。

「ド、ドラちゃん？」

さすがのジグムントもびっくりです。

聖なる木ユグドラシルを「ドラちゃん」なんて、ジグムントだって恐れ多くて呼べないからです。

でもミュウは、ジグムントのまねをただけなのです。

「ふおっふおっふおっ！」

ドラじいさんは怒るでもなく、孫を見るように目を細めます。

ミュウがかわいくて仕方がないようです。

ジグムントは安心して、「ふおっふおっふお」とドラじいさんのまねをして笑います。

ミュウにはそれがとてもおかしくて、お腹を抱えて大笑いしました。

ドラじいさんの木陰は、とても涼しくて気持ちがいい場所です。

ジグムントとミュウはその木陰に腰掛けて、おやつを食べることにしました。

今日ミュウが持ってきたお菓子はクッキーです。

焼きたてさくさくの甘あいクッキーです。

ミユウが藤籠にかけてあった白い布巾を取ると、甘い匂いがふんわりと漂います。

ジグムントは思わず鼻をくんくん鳴らせてしまいます。

「すごくおいしそうな匂いだね！」

「そうでしょう？ パパの焼いたクッキーは世界一おいしいんだから！」

そういつてミユウは、クッキーを一口食べます。

でもミユウのお口は小さくて、かけらがぼろぼろとこぼれてしまいます。

「あ……」

ミユウはエプロンにこぼれたかけらを見て、しょんぼりしてしまいます。

食べ物をごぼすといつもママに叱られるからです。

そんなミユウに、ジグムントは優しく笑いかけます。

「ミユウはお口が小さいからこぼしてもしょうがないよ。それにほら、見てごらん？」

ミユウがエプロンを見ると、アリさんたちがよいしょよいしょとクッキーのかけらを運んでいきます。

次に小鳥さんたちもやってきて、かけらをつついておいしそうに食べ始めます。

「うわぁ、みんなおいしそうに食べてる！」

「ね？ 森ではこぼしても叱られないよ」

ジグムントはミュウの気持ちをとお見通しでした。

ミュウは嬉しくなって、またお日さまのような笑顔に戻ります。

「うん、ジグありがとう!」

それからジグムントとミュウは、おいしいクッキーをお腹いっぱい食べました。

みななさくさくのぼろぼろです。

アリさんも小鳥さんも、みんな笑顔でお腹いっぱいです。

そしてお腹いっぱいになったジグムントとミュウは、ドラじいさんの木陰でお昼寝をしました。

しかしその頃、ミュウの村ではとんでもないことが起こっていたのです。

「あなた、あなた!」

ミュウの家では、ミュウのママが血相を変えてパパのところへ走って来ます。

その手には不思議な輝きを放つジグムントの青いうろこ。

「お、お前それどうしたんだ!」

「あ、あの子の枕の下にあったのよ。きっとあの子が隠したんだわ。

ああ、どうでしょう……」

ミュウのパパは朝早くから、一生懸命クッキーを焼いていました。今もクッキーを焼くために、大きな鉄板を肩に載せていました。その鉄板が大きな音をさせて床に落ちます。

せつかくのクッキーは、床にばらばらになってしまいます。

パパは震える手でママからジグムントのうろこを受け取ります。

そして真っ青な顔で、その青いうろこをじっと見つめます。

ジグムントのうろこは不思議な色をしています。

同じ青でも、見る角度によってはその色合いが変わるのです。

それは作り物では絶対に出せない輝きです。

だからすぐにパパとママには、それが間違いなく本物のドラゴンのうろこだとわかってしまいました。

昔から人間たちにとってドラゴンは恐ろしい怪物でした。

ドラゴンとは、本当は凶暴でずるがしこい生き物なのです。

そしてドラゴンは人間を甘い言葉でだまして食べてしまいます。

ドラゴンに魅入られた人間を、『竜憑^{りゅうじょう}き』と言います。

人間たちにとって竜憑きとは、呪われた存在なのです。

「ま、まさかうちの娘が竜憑きになってしまうとは……」

ミュウのパパは足ががくがく震えて、立っていられなくなってしまいます。

愛する娘がドラゴンに殺されようとしているからです。

「す、すぐに村長さんのところに相談しに行こう」

「ああ、わたしのかわいいミュウ！」

ママはその場に泣き崩れてしまいます。

パパは震える足に力を込めて立ち上がり、お店を飛び出しました。

パパが村長さんの家に飛び込んでいって事情を話すと、村長さんはびっくり仰天してしまいます。

そして白いおひげの生えた顔をくしゃくしゃにして、考え込んでしまいます。

「むう、まさかドラゴンがこの近くにいたなんて…… 竜憑きなど、わしのじいさんのそのまたじいさんの時代にあつたきりじゃ」

「村長さんそんなことはいいから、早くミュウを助けてくれ！ このままじゃ殺されちまう！」

「ううん、わかった。すぐに村の男衆を集めよう。竜狩りじゃ！」

ミュウのパパと村長さんの呼びかけによって、村のたくましい男衆が五十人以上集まりました。

みんな鉋なたや鋤すき、鍬くわなどを手にしています。

「ドラゴンは精霊の森におるようじゃ、みな用心せえ！」
「おう！」

村中の人々が固唾を呑んで見守る中、男衆は村長とミュウのパパを先頭に村を出発しました。

「これ、これ起きんか」

ジグムントはドラじいさんの声で目が覚めました。

お日さまはもうだいぶ西に傾いて、日が暮れてしまいそうです。

ジグムントは慌ててミュウを起こします。

「ミュウ起きて、だいぶ寝坊しちゃったみたい。もうお家に帰らなきゃ！」

「う、ううん……」

ミュウはまだ寝ぼけ眼です。

目をこすりながらミュウが身体を起こすと、目の前に誰か立っていることに気づきます。

それは身体中に葉っぱをくつつけた、気の強そうな少年です。髪は若草色に染まり、瞳も緑色です。

手足は細く、とても身軽そうです。

「あら、あなたはだあれ？」

「きみはシルくん！」

「シルくん？」

ミュウは首をひねります。

ジグムントはにこにこして少年を紹介します。

「シルくんはシルフって言って、風の精霊さんなんだよ。こんにちは、シルくん」

ジグムントはお行儀よくお辞儀しますが、シルフはむすっとして腕組みをしたままお返事をしてくれません。

何だか機嫌が悪そうです。

ジグムントとミュウが不思議に思って顔を見合わせると、ドラじいさんが話し始めました。

「彼は災いが近づいて来るのを、教えに来てくれたんじゃない」

「災い？」

ジグムントとミュウが驚いていると、シルフはミュウを指さします。

「人間たちが大勢やってくる。その子に導かれて！」

シルフの甲高い声が、森に吸い込まれていきます。

森の木々は風に揺れて、ざわざわとざわめき始めます。
ジグムントとミュウは驚いて、目を丸くしてしまいます。

「そ、それって……」

ジグムントが何か言おうとすると、ドラじいさんが静かに話し始めます。

「人間たちはドラゴン…… いや、ジグムント。お前にミュウが殺されると思っておるようなのじゃ」

「そ、そんな！」

「俺は聞いたんだ！ 人間たちは竜狩りだって言ってた！」

シルフは普段、森の周りの草原を走り回っています。

人間にその姿は見えませんが、きっとその時に聞いたのでしょう。
ジグムントとミュウは真っ青になって震え上がります。

まさかそんなことになっているなんて、思いもしなかったのです。

「まだわしの森には、人間たちは入っておらんようだ。今なら逃げられる」

「に、逃げる？」

「ドラゴン、君はその子といっしょにいたら人間たちに殺されてしまうぞ！ すぐに逃げるんだ！」

シルフが鋭い声で叫び、ミュウを睨みます。

ジグムントは首をぶんぶん振って、泣きそうな顔のミュウをかばうように前に立ちます。

「そんなことない！ だってミュウとぼくは友達なもの！ 村の人たちだって、ぼくたちが友達だってわかればそんなことしないさ！」

「君は人間の本当の怖さや残酷さを知らないから、そんなことが言えるんだ！」

ジグムントはシルフとにらみ合い、一步も引きません。

結局シルフは「どうなっても知らないからな！」と言って、姿を消してしまいました。

「きつとジグのうろこがママに見つかってしまったのよ。ああ、どうしよう」

「大丈夫！　ぼくたちが仲良しだって、わかってもらえばいいんだよ！」

ミュウは不安でしたが、村の人はいい人ばかりです。

普段はミュウのお店のお菓子を「おいしい、おいしい」と言っていて、ここにこの笑顔で食べてくれるのです。

だからミュウはとにかくジグは怖いドラゴンじゃないと、みんなにきちんとお話ししようと思いました。

「ドラちゃん、ありがとうございました」

ミュウはジグムントの背中にまたがって、しょんぼりとしてお辞儀します。

「ああ、気いつけてなあ」

ジグムントの背中に揺られて遠ざかるミュウを見ながら、ドラじいさんは深く長いため息をつくのです。

第四話【プリン】：北のドラゴン

村の男衆は、森の入り口で困っていました。
だれも森の中へ入ろうとしないのです。

ここは精霊の森。
神聖な森なのです。

ミュウのような子どもならいざ知らず、大人は信心深いのです。

「おい、どうしたみんな！ 早くミュウを助けてくれ！」

ミュウのパパは、森へ少し入ったところから大声で呼びかけます。
しかし難しい顔をした村長さんを始め、男衆はお互い顔を見合わせ
てひそひそと話をするばかりです。

そんな時森の奥の暗がりから、どすんどすんという重い足音が聞こ
えてきました。

空はだいぶ暗くなってきました。

まだ松明を燃やすほどではありませんが、木々の生い茂る森には一
足早く夜がやって来ています。

「お、おお……」

ミュウのパパが震えながら森から出てきます。

男衆も怯えたようにじりじりと離れていきます。

そして森からぬつと、長い首が出てきました。

それは不思議な青い輝きのうろこを持つドラゴン…… ジグムント
でした。

「お、お前がミュウに憑いているドラゴンか！」

ミュウのパパはピッチフォークという、干し草を集めるための大きなフォークのような農具を構えています。

男衆も油断なく鋤^{すき}や鍬^{くわ}などの武器を構えます。

ジグムントは森からゆっくりと出て来て、男衆たちの前で立ち止まります。

そして悲しげな顔でお辞儀をします。

「ぼくはドラゴンのジグムントと言います。ミュウの友達です」

「パパ！」

ジグムントの背中から、藤籠を持ったミュウが飛び降ります。

「ミュウ！」

ミュウのパパは武器を放り投げて、ミュウを抱きしめます。

「よかった、生きていたか！」

「パパ、ジグをいじめないで！」

ミュウのパパは驚きました。

てつきりミュウは助けを求めてくるのかと思ったからです。

しかしミュウのその言葉を聞いて、村長さんは恐れおののきました。

ミュウが完全にドラゴンの魔法にかかってしまっているのだと思い込んでしまったのです。

「何ということじゃ！ ミュウはすっかり虜^{とりこ}にされておるぞ！」

男衆はジグムントを恐れながらも、ミュウを守るように前へ出てきます。

たくさんの武器がジグムントへ向けられます。

「ま、待ってください！　ぼくは悪いドラゴンではありません！
ミユウとは仲よしなんです！」

「ええいうるさい、ドラゴンはみんな悪いのじゃ！　皆の衆、恐れることはない！　ミユウを守るのじゃ！」

「おおー！」

男衆は武器でジグムントを突き刺します。

けれどジグムントのうろこは硬く、武器を弾き返してしまいます。

「痛い、痛いよー！」

それでもジグムントは、あまりの痛さに涙を流し始めます。

それを見た村長は驚きます。

世界最強であるはずのドラゴンが、男衆の攻撃を受けて涙を流しているのです。

「おお、このドラゴンは弱いぞ！　我々でも退治できそうだ。一気にやつつけてしまえ！」

「よし、やれ！」

「このやろー！」

村長の号令によって、男衆は次々と武器をジグムントへ突き刺します。

さすがのジグムントのうろこも、何度も攻撃されるうちに穴が開いてしまいます。

ジグムントの大きな身体は、どこもかしこも血だらけになっています。

「痛い、痛いよ！ やめて！ ミュウ、みんなにやめてって言うよう！」

ジグムントは男衆にすっかり囲まれて逃げ出すことができません。その場でぐるぐる回って嫌がりますが、男衆は攻撃の手を緩めません。

世界最強の生き物であるドラゴンに勝てるかもしれないと、男衆たちは喜んでいいます。

「やめて！ パパ、みんなにやめてって言うて！ ジグ！ ジグが死んじゃう！」

ミュウはパパの腕の中で暴れます。

しかしミュウのパパは、がっしりとしたたくましい腕で放しません。ミュウがジグムントの魔法にかかっていると信じ込んでいるからです。

「ミュウ、早く目をさませ！ ドラゴンはみんなが退治してくれるから、もう安心していいんだ！」

「違う！ 違うのよ、パパ！ わたしはジグに魔法なんかかけられてない！ ジグは魔法なんか使えない！ お友達なの！ 優しいドラゴンなのよ！」

ミュウの叫び声も、男衆の笑い声とジグの泣き声にかき消されてしまいます。

そしてジグは血まみれになって、ぐったりとしてしまいます。

「おい、ドラゴンのうろこは高く売れるぞ。みんな採って帰ろう！」

「おお、そうだそうだ！」

「戦利品だ！」

男衆はぐったりとしたジグムントの身体から、次々とつろこを剥がしていきます。

ジグムントは頭を前足で覆って、おいおい泣いています。

やがて男衆の輪の中から、ところどころつろこの剥がされたジグムントの無惨な姿が現れます。

「ようし、これだけ痛めつければ、もう人間に手出しなんかしようとは思わんじやろう。皆の衆、よくやった。さあ村へ帰ろう」

「いや、ジグが死んじやう！ パパ、ジグを助けて！ ジグ、ジグ
！」

ミュウの泣き声がだんだん遠くなっています。

すっかり真つ暗になった森のそばの草原では、ジグムントのすすり泣く声だけが風に流れていつまでも響いていました。

「だから言つたろう？ 人間なんか信じちゃいけないのさ」

ジグムントは、住处としている洞窟の奥深くで丸まって泣いています。

心配したシルフが、ジグムントの様子を見に来てくれています。

「これに懲りたら、もうあの娘と会ったりしちゃダメだぞ」

「うう、ミュウ……」

ミュウはたくさん泣いていました。

でもミュウは人間です。

ジグムントはもう人間はこりこりだと思いました。

「人間なんて大っ嫌いだ」

ジグムントは鼻をすすって、また泣き始めます。
シルフはそんなジグムントを、ずっと慰めてあげました。

一方村へ帰ったミュウも、ずっと泣いていました。
夕ご飯も食べずに、ベッドへ潜り込んだままです。

「ミュウ？」

ママが心配して、ミュウの大好きなプリンを持ってきてくれます。
でもミュウはお布団の中でずっと泣いたままです。
パパも心配してミュウのお部屋を覗き込みますが、ミュウの泣き声
を聞くと肩を落としてため息をつきます。

「しばらくそっとしておいてやろう。そのうちドラゴンの魔法は解
けるさ」

「ああ、かわいそうなミュウ」

ママは涙をこぼして部屋を出ていきます。
テーブルの上に置かれたプリンは、ミュウの泣き声に合わせて寂し
そうにふるふると震えていました。

ジグムントとミュウが悲しみに沈んでいる時、村では逆にお祭り騒
ぎでした。

ドラゴンを退治し、貴重品とされるドラゴンのうろこがたくさん手
に入ったからです。

装飾品にしても高く売れますし、削って粉にすれば薬にだってできます。

村中が大喜びです。

しかしミュウの村の遙か北にある別の村では、恐ろしいことが起こっていました。

それは、北の山から現れた黒いドラゴンが村を襲ったのです。

黒いドラゴンはブラックドラゴンといい、ドラゴンの中でも特に強くて凶暴なドラゴンです。

ブラックドラゴンは村をめっちゃめっちゃに破壊し、火を吐いて全部燃やしてしまいます。

そして村人たちを、手当たり次第食べてしまいます。

武器を持って立ち向かう村人もいましたが、炎や爪、尻尾などでみんなやられてしまいました。

ブラックドラゴンは大きな黒い翼を羽ばたかせ、燃えさかる村を空から満足げに見下ろします。

そして目を細めてにいつと笑います。

それはとても邪悪で恐ろしい微笑みでした。

「ちょっと来なかっただけで、ずいぶんと人間が増えたなあ。それにしても人間どもは、自分たちが一番えらいと勘違いしているようだ。山は削られ、木は切られていく。百年前はもつと森がたくさんあったのに」

ブラックドラゴンは恐ろしい声で鳴き声を上げます。

それは人間に対する憎しみの声でもありました。

第五話「みたらし団子」：カゲツチの知らせ

「よお、元気だったか！」

ミュウのパパは突然お店に現れたひげ面の大男を見て、びっくり仰天してしまいます。

それはミュウのパパのお友達で、イザックという人でした。

イザックは世界中を旅して歩く行商人です。

「イザック、久しぶりだなあ！」

ミュウのパパはクッキーを焼く手を止めて、イザックと抱き合います。

イザックの体は埃まみれで、ミュウのパパは苦笑してしまいます。行商人は馬車でいろいろなところへ行くために、自分のお家がありません。

馬車が自分のお家で、外で寝泊まりをするのが普通なのです。

「店も繁盛してるみたいじゃないか。そういえば、前に会った時まだ赤ちゃんだった娘は大きくなったろう。確かミュウって言ったか？ もう、かわいい盛りだろう」

「ん？ あ、ああ……」

ミュウのパパの笑顔が途端に曇ります。イザックは不審に感じて首を捻ります。

「なんだ、何かあったのか？」

「ああ、実は……」

ミュウのパパは、ミュウに起こったことを話します。
イザックは驚いてひげをゆさゆさ揺らせます。

「そうかあ、そりゃあ難儀だったなあ。まさかこんなところでドラゴンの話を聞くとは」
「こんなところでも？」

ミュウのパパはイザックの言葉に、妙な胸騒ぎを覚えます。
イザックは深刻な顔をしてうなずきます。

「ここへ来る前に北の村を通って来たんだが、よくない噂を耳にしたんだ」
「よくない噂？」

イザックは奥にいるミュウのママに気を遣って、声を低くします。
「何でも北の山から黒いドラゴンが現れて、方々で暴れ回っているらしい。中には全滅した村もあるって話だ」
「何だって？」

ミュウのパパは思わず大声を出してしまいます。
その声を聞いて、奥からミュウのママが現れます。

「あなた誰かいるの…… あらイザックさん、久しぶりねえ！」
「奥さん、久しぶりです」

イザックは笑顔を作ってミュウのママと抱き合います。

「今日は何のお仕事でこの村に来たの？」
「いやあ珍しいお菓子を東の国で手に入れたもんで、持って来たん

です」

イザックは足下に置いてあつた麻袋から、葉っぱでくるんだ包みを取り出します。

大きな手に載せられたその包みは、何だか柔らかそうです。

「それは？」

「みたらし団子というお菓子です。作り方も聞いてきたんで、お店の商品にどうかと思つてね」

紐を解くと、中からかわいらしいお菓子が現れます。

もちもちとした丸いマシユマロみたいなお菓子に、餡あんのような薄茶色のとろりとしたソースがかかっています。

そしてそれが三つ、一本の串に刺さっています。

包みの中にはそれが二本、お行儀良く並んでいました。

「あら、かわいらしいお菓子ねえ！」

ミユウのママは大喜びです。

「これは何でできてるんだ？」

「白玉粉と上新粉を半々で混ぜて捏こねたもんだ。もち米とうるち米があればできる」

「なるほど」

ミユウのパパはポケットからメモ帳を取り出して、熱心にレシピを書き始めます。

「奥さん、ミユウが何だか元気ねえって話じゃないですか。こいつはまだまだたくさんあるから、ぜひ食べさせてやってください」

「そうね…… ミュウもきつと喜ぶわ」

ミュウのママは力なく笑いながらお礼を言い、みたらし団子を持って奥へ戻って行きます。

イザックは複雑な表情で、その後ろ姿を見送りました。

その日の夜、ミュウの村から山を越えて北東に馬車で三日ほどのスヴァローグという町にブラックドラゴンが現れました。

ブラックドラゴンは逃げ惑う人間たちに、にやつと笑いながら火を吐きます。

火はあつという間に町中へ広がり、夜空は真っ赤に燃え上がります。

「ははは、燃えろ、燃えろ！ 人間どもなど、みんないなくなってしまうばいいんだ！」

ドラゴンは次々と火を吐き、人間たちの築き上げてきたものを燃やし尽くしていきます。

すると目の前で逃げようとしていた人間が転び、青いきらきらとした物が背負っていた荷物から転がり落ちます。

ブラックドラゴンは目を細めて、その人間の前に舞い降ります。

「おい、人間！ それはなんだ」

「ひ、ひいゝ！」

その男は細工職人で、いろいろなアクセサリを作って売っていました。

ブラックドラゴンはその青いきらきらした物を見て驚きます。

なんとそれはドラゴンのうろこだったのです。

「貴様それをどこで手に入れた！ それは我が同胞どうほうのうろこではな

いか！」

男はブラックドラゴンの雷のような大声に、腰を抜かしてしまします。

そして青いうろこを震える両手で持って、ブラックドラゴンに差し出します。

「ひええっ、お、お助けを！　こ、これは山向こうの小さな村でか買ったんです！　あの村にはドラゴンのうろこがたくさんありました！」

「なんだと？」

ブラックドラゴンは首を伸ばして、そのうろこをじいつと見つめます。

それはジグムントのうろこでした。

青いきらきらとした不思議な輝きは、まさしく本物のドラゴンのうろこです。

炎の照り返しを受けてきらきら光るジグムントのうろこを見て、ブラックドラゴンは恐ろしい声を上げます。

「許せん、許せんぞ！　人間ごときが最強の生き物であるドラゴンを傷つけるとは！　ぬうっ、かくなる上はその村の人間どもを残らず喰らい尽くしてくれるわ！」

ブラックドラゴンは翼を羽ばたかせて、赤く燃え上がる夜空へ飛び上がります。

そして炎よりも真つ赤な瞳を山の方へ向けて、ぎろりとにらみつけます。

細工職人の男はほっと一息つきます。

助かったと思ったからです。

しかし次の瞬間、男のいた場所は炎の海となっていました。

ブラックドラゴンは長い首を振り回し、さらに激しく火を吐き始めたのです。

スヴァローグとは、火の神様の名前です。

皮肉にもスヴァローグは、町の守り神でもある火によって焼き尽くされてしまったのです。

ブラックドラゴンの怒りは収まらず、スヴァローグは一夜にして灰となってしまいました。

そして焼け野原となったスヴァローグから、小さな火の精霊たちが逃げ出していきます。

その内の一人カグツチは、ブラックドラゴンから逃げて山へ向かっていきました。

カグツチはドラじいさんと仲良しです。

もちろんジグムントとお友達です。

だから精霊の森へ逃げようとしていたのです。

カグツチは山を越え谷を越え、精霊の森へ一目散に駆けていきました。

木漏れ日が優しく差し込み、柔らかな風がそよそよと草を揺らしま

す。
ジグムントは傷ついた体を、ドラじいさんの木陰で休ませていま

した。
ウンディーネが癒^いしの水を持ってきてくれたので、ジグムントの体

は日増しによくなってきています。
もうお散歩だって、できるようになりました。

ここまではシルフといっしょに歩いて来ました。
でも剥がされたうろこはまだ元に戻っていません。
ジグムントの痛々しい姿を見て、シルフは深いため息をつきます。

「なあドラゴン、もうそんな悲しい顔をするなよ。お前は悪くない。

悪いのは人間たちなんだから、もう忘れちゃいなよ！」

「とつくに忘れたよ、シルくん。ぼくはもう人間とは関わりたくない。このまま森でみんなと仲良く暮らすんだ」

「ああ、そうだ。それがいい」

シルフは腰に手を当て、何度もうんうんとうなずきます。

でもジグムントは、そう言いながらも寂しそうな目をしています。

この木陰でミュウとお昼寝したことを思い出しているのです。

ミュウのお日さまのように明るく優しい笑顔。

おいしいお菓子。

紅葉のような小さい手のひら。

どれもジグムントにとっては楽しい思い出です。

そして大切な思い出です。

それを忘れることなんかできません。

ジグムントの深いため息で、お花がゆらゆらと揺れています。

「ドラじいさん！」

静かな森に、慌てた調子のかわいらしい声が響きます。

見ると森の奥から、小さな火が近づいて来ます。

ロウソクのようなその火には、細い手足が伸びています。

それは火の精霊カグツチでした。

「カグツちゃん！」

ジグムントは載せていた前足から頭を持ち上げ、目をまんまるにして驚きます。

カグツチは普段、仲間たちといっしょに自分の町で暮らしているからです。

「たいへんだ、黒いドラゴンがこっちに来るよ！ 村を襲うつもりだ！」

カグツチは疲れ切って、その場にへたり込んでしまいます。

ここまで夢中で走って来たようです。

ジグムントは、がたがた震え始めます。

ブラックドラゴンの恐ろしさは、同じドラゴンのジグムントにはよくわかっていたからです。

ジグムントは、向こうの山から何か恐ろしげな声を聞いた気がしました。

第六話「チョコレート」：ジグメントの決意

「ミュウ、またこんなに残して……」

食事の途中で席を立つミュウに、ママは悲しげな目を向けます。

「ママごめんなさい、わたし食べたくないの」

「ミュウ、今日はパパ新作を作ったんだ。後で味見してくれるかい？」

パパはにこにこにつきり歯を見せます。

でもミュウは、悲しそうに笑って首を横に振ります。

ミュウが部屋に戻った後、ママは深いため息をつきます。

「どうしましょう。このままではあの娘、病気になってしまうわ」

「うつむ」

パパは頭を抱えてしまいます。

「あなた、わたし思っただけど……」

ママは真剣な顔でパパを見つめています。

「なんだい？」

「あの娘、ドラゴンの魔法にかかっているわけじゃないと思うの」「ど、どういうことだい？」

パパはびっくりしてしまいます。

「わたし…… いえ、みんなそうなんだけど、ドラゴンが悪い生き物だって一方的に決めつけてしまっていたんじゃないかって」

「それは…… いや、しかし」

「ううん、もちろん言い伝えが嘘だとは思っていないわ。でもね、だからといってわたしにはミユウに憑いていたドラゴンが悪い生き物だったって思えないの」

ママはなぜそんなことを言うのでしょうか。

パパは不思議に思いました。

「あなたは知らないでしょうけど、あの娘森に出かける時いつもうちのお菓子を持って行ってたわ。それも食べきれないほどたくさんでも帰って来ると全部なくなっていたのよ？ ミユウがあんなにくさんのお菓子を、一人で全部食べるなんてありえないわ」

「ママはドラゴンが、ミユウといっしょにお菓子を食べていたっていうのかい？」

ママはパパを見つめたままうなずきます。

「それに森へ行くのを、毎日とても楽しみにしていたの。わたしにはミユウのあの笑顔が魔法で操られていたなんて、どうしても思えないのよ」

「ううん……」

パパは考え込んでしまいます。

ドラゴンがお菓子を食べるなんて、どんな言い伝えでも聞いたことはありません。

ドラゴンとは人間を食べる野蠻で恐ろしい生き物だというのが、あたり前だと考えられていたのです。

「あなた、もう一度」

「うわあ！」

ママが何か言いかけた時、外で叫び声が聞こえます。

パパとママは驚いて窓から外を見ます。

なんと村は、真っ赤に燃え上がっていました。

「たいへんだ、火事だ！」

パパは慌てて外へ出て行きます。

小さな村では、何かあればみんなで助け合います。

火事や病気などたいへんなことや苦しいことは、みんなで協力して乗り越えてきたのです。

「ミュウ！」

ママは慌ててミュウを呼びに行きます。

炎はとても大きく、風向きによつてはこちらへも来てしまいそうだったからです。

「ママ！」

外の騒ぎに気づいて、ミュウが部屋から飛び出してきます。

ママはミュウをしっかりと抱きしめて、外へ出ます。

そしてママとミュウは見ました。

真っ赤な炎に照らされた、つやつやとした黒いウロコを。

それは途方もなく邪悪で大きな黒いドラゴンでした。

「人間ども、思い知るがいい！ お前らに傷つけられた生き物たちの苦しみを！」

ブラックドラゴンの怒りの声が雷のように落ちてきて、ママとミユウは恐怖でへなへなと座り込んでしまします。村は大混乱です。

遠くで火事を知らせる鐘が鳴り響き、村人たちはあっちへうろこつちへあたふた逃げ惑っています。

ブラックドラゴンは大きな翼を広げて、村の上をゆうゆうと飛んでいます。

時々ごとと火を吐いたり、長い尻尾をぶんと振り回して建物を壊しています。

家の前の通りは、すでに壊された建物の破片がたくさん散らばっています。

「ママ、怖いよう!」

ミユウは小さな体をふるふる震わせ、ママの胸で泣き出します。

ママも怖くて怖くて仕方がありませんでしたが、ここには二人ともドラゴンに殺されてしまします。

とにかく逃げようと、ミユウをしっかりと抱いたまま歩き始めます。すると何かを踏んづけてしまします。

それはころころとした丸いチョコレートでした。

そしてよく見るとそれは、地面へたくさん散らばっています。

ミユウのパパはイザックから教えてもらったみたらし団子をチョコレートで包み込んだ、新作のお菓子を作ったのです。

みたらし団子をこの国の人たちの口に合うように、ソースではなくチョコレートで包んだのです。

それは間違いなく、パパのチョコレートでした。

「あなた!」

散らばったチョコレートの先に、ミュウのパパがうつぶせに倒れています。

どうやら壊された建物の破片で、頭を打ってしまったようです。

「パパ！」

ママとミュウはパパの所へ走って行きます。

「う、うっ……」

パパは頭にケガをしています。

「あなた、大丈夫？」

「パパ！」

「お、お前たちは、早く逃げろ…… ド、ドラゴンが襲って来るぞ」
「そんな、あなたを置いて逃げるなんてできないわ！」

ママもとうとう泣き出してしまいます。

ミュウは怖くて悲しくて、涙と震えが止まりません。

ブラックドラゴンの恐ろしい鳴き声がまた聞こえます。

ミュウは震えながら思いました。

やっぱりドラゴンは怖い生き物なんだと。

村長さんやパパたちは、間違っていたのだと。

炎はますます燃え広がり、ミュウたちの方へ迫ってきます。

ブラックドラゴンの恐ろしい鳴き声が、今度はすぐ近くで聞こえました。

「なあ、どうしてそんなに怖がるんだよ」

洞窟の奥では、ジグムントが丸くなって震えています。
シルフは腰に手を当ててため息をつきます。

「ブラックドラゴン人間どもを懲らしめに来たんだから、この森は襲って来ないって」

精霊たちの住むこの森は神聖な森です。

いくらブラックドラゴンでも、この森を襲うことはありません。
しかしジグムントは、ブラックドラゴンが怖くて震えているだけではないのです。

ミュウが死んでしまうかもしれないと思って、怖くて仕方がないのです。

「あの娘が心配なのはわかるけど、しょうがないさ。人間だもの」

ジグムントも人間が嫌いです。

ひどい目に遭わされたからです。

でもだからといってミュウが嫌いかというと、そんなことはありません。

ジグムントは震えながら、ミュウのことを思い出します。

『だってあなたは優しい目をしてるもの。怖くなんかないわ』

ミュウはジグムントに優しく笑いかけてくれました。

『わたしたち今日からお友達ね！』

ミュウは落ちこぼれでいじめられっ子のジグムントと、友達になっ
てくれました。

『ずっとジグといっしょだね!』

ジグムントもミュウが大好きです。

ずっといっしょにいたいと思っていました。

『じゃあジグムントってお名前はどうかしら? この国に伝わる強い騎士さんのお名前よ』

ミュウはジグムントに名前をつけてくれました。

「そっだ」

ジグムントは頭を上げます。

急に動き出したジグムントを見て、シルフはびっくりします。

「ど、どうしたんだよ急に」

「ぼく行かなきゃ!」

「どこへだよ」

ジグムントはもう震えています。

しっかりと前を向いて、のっしのっしと洞窟を出て行きます。

「ミュウのところへ」

「な、なに言ってるんだよ? 殺されるぞ!」

シルフは慌ててジグムントの前に回り込み、行く手を遮ります。
けれど、ジグムントは歩くのを止めません。

「それでも行かなきゃならないんだ」

「なんで……　なんでだよ！　お前は人間に、ひどい目に遭わされたんだぞ！」

シルフは力いっぱい大声で叫びます。

森の動物たちが驚いてその様子を見ています。

「ぼくは強い騎士のジグムントだ。そしてミュウは友達だ。騎士は友達を守らなくちゃいけない、何があっても」

「バカっ、死にたいのかよ！」

ジグムントはシルフの叫び声を背中に受けながら走り出します。

森の動物たちは慌てて道を空けます。

どすんどすん地面が揺れて、それはどんどん離れていきます。

「ドラゴンのバカやろう！　知らないからな、本当に知らないからな！」

ジグムントの走って行く先の空は、燃え上がる炎で真っ赤になっていました。

最終話「ケーキ」：騎士の伝説

火の粉がばちばちと夜空へ高く舞い上がります。

黒い煙が星空を覆い尽くし、村人たちの悲鳴が響いています。

炎はすでに村の半分を飲み込んで、もはや村人たちにはどうしようもありません。

逃げ惑う人間たちを見下ろして、ブラックドラゴンはいと目を細めます。

「どうやらまんまと西へ逃げているようだな。あとはまとめてみんな食ってやる」

ブラックドラゴンは村の東に火を放ちました。

そして北と南の建物を飛び回って壊しました。

村人たちはブラックドラゴンに、いつの間にか西へ集められていたのです。

それはもちろん、人間たちをひとまとめにするためです。

村の西にあるミュウのお家は、まだ炎からもブラックドラゴンからも無事です。

けれど炎はどんどん迫ってきています。

村人たちも我先にと逃げていきます。

道の端にいるミュウたちには、誰も目もくれません。

助け合うどころか、自分たちが逃げるので精一杯なのです。

「お前たち早く逃げるんだ！」

ミュウのパパは必死に手を振り回します。

顔中汗でびっしょりです。

「いやよ、どうせ死ぬならあなたといっしょに！」

「パパ、パパあ！」

周りで逃げ惑っていた村人たちは、誰もいなくなっていました。みんな逃げてしまったのです。

ミュウたちは村の中に取り残されてしまいました。すると急に風が止みます。

赤々と燃えていた炎の光も暗くなります。

不思議に思ってミュウが顔を上げると、そこには空を覆うように翼を広げたブラックドラゴンの真っ赤な瞳が二つらんと輝いていました。

「きゃあ！」

ミュウは涙で真っ赤になった目を大きく見開きます。

ミュウたちはとうとうブラックドラゴンに見つかってしまったのです。

「んん、なんだあ？　こんなところに逃げ遅れた人間がいるぞ」

ブラックドラゴンは地響きを立ててミュウたちの前へ舞い降ります。ママはミュウを強く抱きしめます。

パパは必死に体を動かして、ミュウとママを背中を守ります。

「お、お前たち、パパが何とかするから今すぐ走って逃げなさい」

「はあっはっはっはっ！　逃がすわけがないだろう？　こんなおいしそうなごちそうを」

ブラックドラゴンは真っ赤な長い舌をぺろりと出します。

「生きたまま食べるのもうまいが、こんがり焼いてもうまそうだな」
ブラックドラゴンは胸をふくらませて、大きく息を吸い込みます。
大きな鼻の穴からは、小さい炎がびゅうびゅう噴き出ています。
地面がどんどん大きく揺れ始めます。
ミュウはぎゅっと目をつむって、ママの胸にしがみつきます。
そして思わずつぶやきます。

「ジゲ、助けて」

その瞬間、ブラックドラゴンが勢いよく首を振ります。
大きく開けられた口から、ものすごい勢いで炎が吹き出されます。
けれどもミュウたちは無事でした。
ブラックドラゴンの炎は、ミュウたちへは届かなかったのです。
ミュウたちの前には、ところどころうるこの剥がれた青い大きな体
が盾になっていました。

「ジゲ！」

それはなんとジグムントでした。

「ミュウをいじめるな！」

ジグムントはブラックドラゴンをきつとにらみつけます。
でもその身体は小さく震えています。
ブラックドラゴンを前にして、本当は怖くて怖くて仕方がないので
す。

「なんだ貴様、我が同胞のくせに人間の味方をするのか？」
「人間の味方じゃない、友達を守るんだ！」

「友達？」

ブラックドラゴンはいと笑います。

「人間が友達のわけないだろう。人間は自分勝手に自然を破壊する生き物だ。我々ドラゴンは自然に代わって、人間どもを懲らしめなければならんのだ」

「ぼくだって森や動物たちは大好きだ。でも友達だって同じくらい大切なんだ！」

「ぬうつ、これほど言ってもわからんかばかものめ。それなら人間といっしょに懲らしめてくれるわ！」

ブラックドラゴンは大きく息を吸います。

ジグムントはその隙に走り出します。

「ぼくは強い騎士のジグムントだあ！」

ジグムントはブラックドラゴンの首に噛みつきます。

ブラックドラゴンは、まさか相手が噛みついてくるとは思わずびっくります。

「き、貴様、何をする！」

「うわあああああ！」

ブラックドラゴンは首を振ってジグムントを振り払おうとします。しかしジグムントは絶対に放しません。

「こ、こいつ、放せ！」

ブラックドラゴンは爪や尻尾でジグムントを叩きます。

ジグムントのうろこのないところからは、たくさん血が流れ出します。

「ミュウをいじめるな！ ぼくの友達をいじめるな！」

ジグムントは叩かれても爪で傷をえぐられても絶対に放しません。ブラックドラゴンは大きく息を吸って、ジグムントに炎を浴びせかけます。

ジグムントの体はじゅうじゅう焦げていきます。

うろこがちゃんとあったならば、炎にも耐えられたはずです。でもうろこのないところは、どんどんと焼け焦げていきます。

ジグムントは痛くて熱くて苦しくて仕方がありませんでした。涙をいっぱい流しながら、それでも顎あごに力を込めて牙を食い込ませます。

「くそ、くそおっ！」

ブラックドラゴンは我慢しきれず、翼を広げて夜空へ飛び上がります。

ジグムントはずっと首に噛みついたままです。

首にぶら下がったジグムントへ向けて、ブラックドラゴンはまた爪を突き立てます。

その勢いでジグムントはとうとう地面へ落ちてしまいます。

ブラックドラゴンの首には、大きな傷ができていました。

そして痛さにひいひい言いながら、北の空へと逃げていきました。

「ジグ、ジグ！」

ミュウがぐったりと倒れているジグムントへ駆け寄ります。ジグムントは真っ黒に焦げていて、血だらけです。

それでもミュウはジグムントの頭にしがみつきます。

「ジグ、助けてくれてありがとう!」

泣きながらジグムントにしがみつくミュウを、パパもママも止めません。

それよりも自分たちがいかに愚かだったかに気づき、申し訳ない気持ちでいっぱいでした。

いつの間にか周りには、村人たちが集まってきています。

村長さんも男衆たちもいます。

みんなジグムントがどれだけ勇敢に戦ったか、その目で見ていたのです。

「ジグ、死なないで! 目を開けて!」

「ミュウ……」

ジグムントはうつすらと目を開けます。

目には涙がいっぱいです。

「ぼく、騎士になれたかなあ。ミュウを守る、強くてカッコいい騎士になれたかなあ」

「うん…… うん、もちろんよ! わたしを守ってくれてありがとう! だから死なないで! わたしたちずっと友達でしょう? またいつしよにお菓子を食べましょう? たくさんお話ししましょう?」

「ごめん、ミュウごめん。ぼくもうだめだよ…… でもミュウ、泣かないで。ぼくとミュウは…… ずっと、友達…… ち……」

「ジグ、ジグう!」

ジグムントはミュウの腕の中で、静かに息を引き取りました。

閉じられたジグムントの目から一粒の涙が落ちて、ミュウの膝を濡らします。

村人たちは深く頭を垂れ、目をつぶります。

帽子を脱いで胸の前でぎゅっと握る者、手を組んで祈りを捧げる者、膝について許しを乞う者さまざまです。

みんな深い悲しみと後悔に打ちひしがれていました。

「ジグうう！」

ミュウの泣き声は輝き始めた星空へ吸い込まれるように、ずっと響いていました。

その後ミュウの村では復興が始まりました。

みんなで協力して、焼け落ちたり壊された家を建て直しているので

そして村の中央広場には、ジグムントの銅像が建てられました。

ジグムントの勇気を称え、自分たちを戒めるためです。

そしてプレートにはこう書かれました。

『勇気ある騎士ジグムント』

と。

「ジグ、お菓子を持って来たよ」

木漏れ日が森の中に光の柱を作り出しています。

ミュウはドラじいさんのところに来ています。

ジグムントは、ドラじいさんの根元に眠っているのです。

村人たちが精霊たちの許可を得て、ジグムントをここに埋めたのです。

ミュウは藤籠の中からまああるいホールケーキを取り出します。

バナナクリームをたっぷり使って、ジグムントの大好きなイチゴがたくさん載っています。

「ジグ、これね？ わたしが初めて焼いたケーキなんだよ。わたしもつともつといっぱいがんばって、おいしいお菓子をたくさん作るね？ だからジグもたくさん食べてね」

ジグムントはミュウの心の中で、そしてこの森の一部となって生きています。

ミュウには目玉をくりくり動かして、どすんどすん足踏みして喜ぶジグムントの姿が目に見えかぶようです。

ミュウのケーキには、チョコレートでこう書かれていました。

『ジグ大好き　ずっと友達だよ』

ジグムントの銅像は世界各国の村や町に建てられました。

不思議なことに、その銅像のある村や町は災難に遭わなくなるのです。

人間たちは知らないことでしたが、それは精霊たちの力によるものです。

ブラッドドラゴンはその後、どこへも現れませんでした。

人間たちが自然を大切にしてジグムントのことを忘れない限り、二度と現れることはないでしょう。

火も吐けないし空も飛べない。

魔法も使えないけれど、心優しく勇気あるドラゴンと人間の女の子の悲劇の物語。

そのお話は伝説となり、人間たちが自分たちを戒めるものとしてずっと長い間語り継がれていきました。

小鳥たちの囀る^{なみさす}明るい陽射しの中、ミュウとジグムントはお花を摘んでいます。

ミュウは白いお花で王冠を作っています。

『ねえ、ミュウ』

『なあに?』

『ミュウはお菓子が好きなんだねえ』

ミュウはお日様のようにはっと明るい笑顔になります。

『だあい好きよ! でも……』
『でも?』

ミュウは王冠をジグムントの頭に載せます。

『ジグの次にね!』

ジグムントは目をぱちくりします。

ミュウは満面の笑顔です。

『あは、ははは!』

『ふふふ!』

ジグムントとミュウは白くかわいらしいお花畑の中で、いつまでもいつまでも楽しそうに笑っていました。

「最弱ドラゴンの物語」
　　ゝ　　おしまい
　　ゝ

最終話【ケーキ】：騎士の伝説（後書き）

最後まで読んでいただき、まことにありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7080r/>

最弱ドラゴンの物語

2011年9月4日21時30分発行